

テゼ共同体と教父たち— *Soyons l'âme du monde* を基に*

打 樋 啓 史**

はじめに

テゼ共同体 (Taizé-Communauté: 以下「テゼ」と記す) は、1940年、スイス出身のロジェ・シュッツ (以下「ブラザー・ロジェ」と記す) によって、フランス、ブルゴーニュの寒村テゼに創始された男子修道共同体である。現在カトリックとプロテスタント各派出身の約100名のブラザー (修道士) たちから成るエキュメニカルな共同体テゼは、初めから戦争と分裂の只中で自らが目に見える「交わりの譬え」 (une parabole de communion) となることを目指し、現在まで教会の和解と人類の和解のための祈りと働きを続けてきた。このテゼは今日、年間を通して何万もの若者たちが一週間単位のプログラムに参加するために世界各地から集う、国際的な出会いの場としても知られている。¹⁾

1996年、テゼが一冊の書物 *Soyons l'âme du monde: Textes choisis des chrétiens des premiers siècles* を出版した。副題のとおり、この書は

「初期のキリスト者たちが記した諸文書からの抜粋集」、特に新約諸文書が記された後の時代に活躍した「教父」と呼ばれる著作家たちの言葉を集めたものである。²⁾

これまで、ブラザー・ロジェが毎年記す黙想のテキスト『テゼからの手紙』 (以下『手紙』と記す)³⁾などで、教父からの引用が聖書からの引用に次いで数多くなされており、教父の言葉が手紙のタイトルとなっている場合もある⁴⁾。 *Soyons l'âme du monde* には、これらブラザー・ロジェが引用してきたテキストの多くが出典を明記した形で収められ、その他にもテゼの霊性に直結する多くの言葉が掲載されている。

本稿では、この書を中心に据え、テゼにとっての教父たちの位置と影響を検討したい。まずテゼにとって基本的に教父の存在がいかなる位置にあるのかをおさえ、次に *Soyons l'âme du monde* のテキストに基づき、教父たちがテゼに与えている影響を考察する。

*キーワード：テゼ共同体、教父、霊性

**関西学院大学社会学部専任講師・宗教主事

- 1) テゼを知るための資料となるブラザー・ロジェ自身の著作の中で最も重要なものは、Brother Roger of Taizé, *No Greater Love: Sources of Taizé*, London 1991 (邦訳は、ブラザー・ロジェ著、植松功訳『テゼの源泉：これより大きな愛はない』、ドンボスコ社 1996年) であろう。テゼ共同体によって作成されたビデオの日本語版も二種類出されている。『テゼ— 信頼に生きる』 (サンパウロ 1995年) と『テゼ— 歌による祈り』 (サンパウロ 1997年)。現在のテゼの動きを知る上では、隔月で発行される機関紙 *Letter from Taizé* が役立つ (購読申込は、Taizé-Communauté, 71250 Cluny, France)。このアジア版は *Taizé Letter* というタイトルで、特にアジア諸国でのテゼの働きが報告される。ホームページ <http://www.taize.fr> も充実している。テゼの歴史について第三者が記したものとしては、やや古いのが、J. L. Gonzalez Balado, *The Story of Taizé*, London 1980がある。これ以外にも、ブラザー・ロジェの他の著作やテゼのCDが日本でも入手できる。
- 2) *Soyons l'âme du monde: Textes choisis des chrétiens des premiers siècles*, Les Presses de Taizé 1996。タイトル「世の魂として生きよう」は、この書に引用される『ディオグネートスの手紙』の言葉 (p. 15) から取られている。以下の注では *Soyons l'âme du monde* と略記する。
- 3) 上記の機関紙 *Letter from Taizé* の Special Issue として毎年の初めに発行されるもの。以下の注ではこれを *Letter* と略記する。
- 4) *From One Beginning to Another*, *Letter* 1994 はニュッサのグレゴリオスから。

1. テゼにとっての教父の位置

1.1. 「伝統」の意義

テゼがなぜ多くの若者たちをひきつけてやまないのであるのかについて、レナの洞察はたいへん的を得ている。「テゼは基本的に変化しなかったからこそ、鏡の移ろいやすい印象よりもはるかに深い意味において、若者たちは明らかにテゼに『自らの姿を確認する』のである。それはテゼが、しばしば不確定な若者各自の探究と、多少とも意図的に結託しているからではなく、その全く反対に、テゼが確固たる霊的アイデンティティーをもっているからである。」⁵⁾

テゼの「確固たる霊的アイデンティティー」とは、一朝一夕に生み出されたものでなく、歴史性をひとつの特色とする。ブラザー・ロジェは、「わたしたちは、最初の時代から今日に至るまで、先を歩んだすべてのキリスト者の信仰によって支えられている」⁶⁾と述べ、これは *Soyons l'âme du monde* 作成の動機としても明記される。「困難な状況をくぐり抜けるときも、信頼を繰り返し芽生えさせるためには、同じ道を先に歩いた人々による道案内が必要です。彼らはわたしたちの深みに信頼という大胆さと呼び覚ましてくれます。そこで、今日わたしたちが、『教会教父』と呼ばれる初期の教父たちに耳を傾けるために、テゼはこの抜粋集を作成しました。」⁷⁾

ここでは、近代的キリスト教が陥りがちな「個人の信仰への過信」に慎重な態度がとられ、今ここですべてを信じ理解できない自分が、あらゆる時代の先達の信仰によって支えられているという歴史観が示される。テゼからほとばしり出る創造性は、そのような歴史と伝統の安定感を土台としていることが看過されるべきではない。そして、テゼが歴史を見つめる眼差しの中で、初期の証人である教父らの存在がとりわけ大きな位置を占め

ることが、*Soyons l'âme du monde* の出版からも知られる。

1.2. なぜ教父なのか

では、なぜ教父なのか。ブラザー・ロジェの著作には、様々な時代の様々な背景をもつキリスト者たちの言葉が引用されるが、古代の教父の言葉がより頻繁に持ち出され、大きな意味を有すると思われるのはなぜか。

まず、教父たちの「古さ」が理由にあげられよう。「教父たちは、わたしたちよりもずっと、イエスや使徒たちに近い時代に生きた。」しかし、その古さとは、「福音が人の心を容れさせるという確信に満ちた若々しさ」に他ならない⁸⁾。初期の教父が生きた時代とは、キリスト教が周囲の目には新奇なものとして映り、迫害と殉教にさらされた時代であった。このような時代に属する教父の言葉や生き様には、確かに中世以降のキリスト教世界とは性格を異にする信仰の若々しさと大胆さが見られる。それは、彼らの選択が当時の社会でなお新しく、それゆえに大きなチャレンジを受けることを余儀なくされたから育まれた若々しさであった。テゼは、この「信仰の若々しさ」をひとつのモデルとして、自らの霊的アイデンティティーを形成してきたと言える。

さらにテゼは、この時期に生きた教父たちの姿を、時代の転換期に模索する今日の若いキリスト者たちになぞらえる。「教父たちが抱いていた疑問やキリストへの信仰の新しさを当時の社会の中で表現しようとする心遣いは、今日を生きるわたしたちの疑問や関心と重なってくる。」⁹⁾ 主にギリシア哲学に基づく世界観が支配的であった時代、初期の教父たちは、その言語や表現を援用しつつ福音の真理を語り、迫害や殉教を避けられなくともそれを生きようと志した¹⁰⁾。今日を生きる若いキリスト者たちの問いは、たしかにある意味で彼らの問いに重なる。「最先端の科学やテクノ

5) マルグリット・レナ著、中山真里訳「テゼ」(『神学ダイジェスト』75号 上智大学神学会神学ダイジェスト編集委員会 1993年)、33-34頁。

6) *Astonished by Joy, Letter 2000*, n. 6.

7) *Soyons l'âme du monde*, p. 10-11.

8) *Soyons l'âme du monde*, p. 10.

9) *Soyons l'âme du monde*, p. 11.

ロジーが前提となった今日、キリストを通しての神への信仰をどのように生き、伝えることができるのか。」

ヨーロッパにおいてもキリスト教がもはや自明のものではない今日に生きる上で、テゼは、キリスト教がまだ広く認知されていない時代に生きた教父たちの姿にひとつのアイデンティティーを求め、それを指し示すことで若者たちを励まそうとするのである。

テゼが教父を重視する第二の理由は、こう明記される。「教父たちは、教会が東西に分裂する以前の、最初の千年紀に生きた人々だった。それゆえに、彼らの存在はすべての異なる背景をもつキリスト者に共有の宝であり、わたしたちをキリストの体というユニークな交わりへと招き入れてくれる。」¹¹⁾

分裂してきた教会の和解を追い求めてきたテゼでは、異なる教派的背景をもつブラザーたちが共に生活し、世界中の多様な教会からやって来た若者たちが出会う。そこでは、皆が共に祈り、静まり、働き、語り合うことを通して、違いを貫いたところに息づく源泉に降りていくように、また偏見を捨てて互いの伝統の豊かさを学び合うように招かれる。

エキュメニカルであることを本質とするテゼにとって、教父というエキュメニカルな歴史遺産は大きな意味をもつ。また思想的にも、教父の教えは、後の論争的な教義神学とは異なり、神との交わりを大胆に表現する神秘思想の色彩が濃い。それは「イデオロギーに結びついた言説ディステールではなく、反イデオロギー的な秘義伝授ミスツゴキアである。」¹²⁾ そこに、理論を超えた次元で、単純な信頼による和解の地平を開くひとつの鍵があるということではな

いだろうか。

1.3. テゼの歌と教父の言葉

この章のおわりに、「テゼの歌」と教父の関わりについて述べておきたい。現在世界中で広く用いられるテゼの歌は、予期せぬ多様な訪問者を迎え入れるようになった頃、異なる言語や背景をもつ人々がどうすれば共に祈ることができるか、という問いから生まれてきた。試行錯誤を繰り返し、やがて聖書から取られた短い言葉に単純な旋律をつけ、何度も繰り返して歌うことによって皆が共に祈る、という形が編み出された¹³⁾。

注目したいのは、テゼの歌の中に、聖書だけではなく教父の言葉から歌詞をとったものも見られることである。最も印象的な一例として、*Dieu ne peut que donner son amour*¹⁴⁾があげられる。これは、シリア教父ニネヴェのイサクの言葉で、ヨハネの手紙Ⅰ第4章の「神は愛」をパラフレーズしたものである¹⁵⁾。

テゼの歌は、多様な人々を祈りの内に一つに集めることと同時に、短い言葉を繰り返し歌うことを通して、「いつしかその言葉のもつリアリティーが歌う人の全存在を貫き、昼も夜も心の沈黙の中で、人が祈り続けることを可能にする」¹⁶⁾という価値をもつ。その意味で、テゼの歌による祈りは、lectio divinaのひとつの在り方としての意義を担う。

この祈りの歌に教父の言葉が用いられている意味は大きい。聖書と異なり、多くの若者が触れる機会の少ない、千年以上も前のシリア教父の言葉の一節が美しい歌となり、多数の声の調和で歌われるとき、その言葉は新鮮な響きをもって若者たちを励ます。「神にとって唯一可能なこと、それ

10) 例えば、ユスティノス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲネスなどがこの代表的な人物である。

11) *Soyons l'âme du monde*, p. 11.

12) レナ、前掲論文 35頁。

13) テゼの歌が生まれた経緯やその意義について詳しくは、ビデオ『テゼー歌による祈り』、また、打植啓史「テゼ共同体—その典礼と音楽」(『礼拝と音楽』87号、日本基督教団出版局 1995年)を参照。

14) テゼの歌集 (*Chants de Taizé*, Ateliers et Presses de Taizé 1999.) の51番。

15) 出典は不明であるが、正教神学者 Olivier Clément がテゼについて記した書、*Taizé: A Meaning to Life*, Chicago 1997, p. 77にひとまとまりのテキストが引用されている。この他にもたとえば、*Mon âme se repose* (歌集32番)は、アウグスティヌスの『告白録』の冒頭にある祈りから取られたものであるし、*Jésus le Christ* (歌集9番)も同書から取られた言葉である。

16) *Chants de Taizé* の序文より。

は愛を与えること。」このイサクの言葉を何千もの若者たちとブラザーたちとが繰返して共に歌う景色の中に、「今日を生きる私たちが、先達の信仰によって支えられている」という歴史観の、最も具体的で美しい表現が見て取れる。

2. *Soyons l'âme du monde* の内容 —「内なる命と人間の連帯」に重ねて

以上のことを前提に、*Soyons l'âme du monde* の内容から、個々の教父の言葉とテゼの霊性との結びつきを探っていく。この書は、時代的には1世紀末から11世紀、地理的にも初期キリスト教界の東西の幅広い範囲に生きた教父らの言葉の抜粋集であるが¹⁷⁾、その性格は基本的に、学術書ではなく、黙想のテキストである。選ばれた言葉や訳文からも、これが若者にとっての親しみやすさとメッセージ性を重視して編まれおり、読者が教父の心を自分の心で受けとめ、霊的な糧としていくことをねらいとしているのが分かる。

では、*Soyons l'âme du monde* に収められた教父たちの言葉が、どのような形でテゼの霊性に歴史的根拠を与えているのかをテキストに基づき検討するが、その際にテゼが長年若者たちの世界大会のテーマとしている「内なる命と人間の連帯」(Inner Life and Human Solidarity) をキーワードとして考えることが役立つであろう。

「観想的な祈りの道」と「苦悩する人々との連帯の道」を不可分のものとして生き、それによって破壊された世界に和解を創り出すこと、このテゼの方向性が、聖書はもちろん、それ以後の初期キリスト教思想にも連綿と息づいており、ここにテゼの霊性のひとつのルーツがあることがこの書から示される。教父たちも、「内なる命」、すなわち神への信頼や祈りなどについての洞察を言葉にし、同時に「人間の連帯」、つまり他者との共生や教会の使命などについて熱く語る。そして、彼らがこの二つを不可分のものと理解し、この結合

の中にキリスト者の生の本質があると認識していたことが窺い知られる。

そこで「内なる命」、「人間の連帯」の順で、それぞれに言及した教父のテキストを紹介し、それぞれがテゼの重視するキリスト者の生の諸次元に深く結びついていることを示したい。

2.1. 内なる命

2.1.1. 祈り

教父たちはしばしば祈りの重要性について語る。その際の特徴は、長い言葉や複雑な思考による祈りには批判的な態度をとり、心の沈黙やわずかな言葉を媒介とした「神との交わり」としての祈りを強調することである。テゼの生活の中心である祈りの在り方が、多くの部分でここから影響を受けていると思われることを、二つの点から見ていきたい。

2.1.1.1. 沈黙

Soyons l'âme du monde に収められた祈りに関する教父の言葉から、まずアウグスティヌスの言葉をとりあげよう。「心にひとつの声、ひとつの舌があります。この内なる声はわたしたちの祈りです。唇が閉じていても、魂は神の前で開きます。わたしたちが沈黙していても、心は語ります。人の耳には聞こえなくても、神には聞こえるのです。神はあなたの内なる声をお聞きになります。」¹⁸⁾

テゼの会則にあたる「小さな源泉」にこの言葉が引用されるように¹⁹⁾、これが観想修道会テゼにとって生命線となる祈り、つまり深い沈黙の中で育まれる「心の祈り」である。「何よりも、沈黙の中で神のうちに憩う、これこそ祈りの核心です。」²⁰⁾ テゼでの一日三回の「共同の祈り」は、きわめて黙想的色彩の濃いものであり、その中で「沈黙」の時間が十分にとられる。さらに、個々の黙想の時が大切にされ、そのための環境が整えられている。希望者は一週間をまったくの沈黙の

17) その意味で、最終章“De la tradition monastique”には、厳密な意味で「教父」の範疇には含まれない時代の人物も取り上げられる。

18) アウグスティヌス『詩編注解』、125、8。(Soyons l'âme du monde, p. 118.)

19) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』、93頁。

20) マザー・テレサ/ブラザー・ロジェ著、植松功訳『祈り：信頼の源へ』、サンパウロ 1994年、64-65頁。

中で過ごすこともできる。

テゼを訪れる若者たちは、沈黙を通して、外的にも内的にも雑音に満ちた日常の中では見えなかった生の次元に触れる。それは「心の力」に目覚める体験、生に意味を見出す体験である²¹⁾。この沈黙が定着していくとき、心はおのずと最も本質的なものへと向かう。これが、「沈黙の中で神のうちに憩う」ということであろう。

アンブロシウスの表現では、沈黙の祈りとは、自らの「内なる秘密の部屋」に入り、神が言葉になる以前の魂の深奥にある祈りを聴かれることを信頼し、自らを神に空け渡すことである。これは多くの言葉による祈りよりも、はるかに大きな仕方方で神への信頼を表す²²⁾。

オリゲネスは記す。「各々の魂に、生きた水の湧き出る井戸があり、この魂の中に神のかたどりが隠されています。しかし、この井戸を敵の力がふさいでしまったのです。」オリゲネスによれば、人が自らの内奥に刻まれた神のかたどりを見出そうと、「魂を覆う土を取り除き、再び泉を湧き出させる」ための営みが祈りである、ということになるであろう²³⁾。

2.1.1.2. 短く本質的な祈りの言葉

このような沈黙は無前提に与えられても、心の空漠に陥る危険がある。そこで、沈黙を最も本質的なものへと向かわせ、「神に聴く」時とさせるのが、ごくわずかな短い言葉による祈りである。逆に言えば、沈黙を通して、短い言葉が指示するリアリティーが輝き出で、人の内奥に染み渡っていく。

テゼの「共同の祈り」では、答唱詩編、聖書朗読、共同祈願などで最小限の洗練された言葉だけが用いられ、説明調の言葉は一切語られない。そして先述のとおり、それらの合間に短い祈りの歌

が繰り返し歌われ、その歌詞がその後にも心に宿り、人を内から生かす力となるように意図されている。

この短い言葉の繰り返しによる祈りは、何もテゼが創作したものではない。長いキリスト教史の中で、すでに同様のアイデアや方法の使用が見られる²⁴⁾。教父たちもこの流れの中で、短い言葉による絶えざる祈りの意義を説く。

砂漠の師父マカリオスは言う。「祈るとき、くどくどと語る必要などない。ただ手を広げてこう言いなさい。『主よわたしを憐れんでください。』」²⁵⁾ テゼの共同の祈りでも、「共同祈願」の際に、「キリエ・エレイソン」が繰り返し歌われる。この謙遜な言葉の繰り返しによる祈りは、4世紀以降爛熟した都市の文化から離れ、砂漠に生きた隠者たちの生活の中で育まれたものであったことが知られる。

ヨハネ・カシアヌスは、祈りの最中に様々な思考がさまよい出るとき、一定の「祈りの型」が心を祈りと黙想に立ち帰らせる助けになると説く。例えば短い詩編の言葉、「神よ、わたしを助けに来てください」（詩編70, 2）がこれに当たる。ヨハネ・カシアヌスによれば、人は生活のあらゆる場面で「祈りの型」を繰り返し唱えることで、絶えず神の現存に目覚めることができるのである²⁶⁾。

ラテン教父ではアウグスティヌスが、沈黙の祈りを重視すると同時にこう記す。「決められた時刻に、言葉で神に祈ることも必要です。祈る時に口にする言葉は、心をあこがれの対象へと引き上げます。」その際、この言葉による祈りとは、「たくさんさんの言葉による神への長いおしゃべり」とは明らかに異なることが記される²⁷⁾。

21) Clément, *op. cit.*, p. 53–54.

22) 『 sacramentについて』 VI、11–13、15–16、18–20。(Soyons l'âme du monde, p. 109–110.)

23) 『創世記説教』 X III、3–4。(Soyons l'âme du monde, p. 46–48.)

24) 東方では「イエスの御名の祈り」、西方では「ロザリオの祈り」が例としてあげられる。この内、「イエスの御名の祈り」についての優れた解説として、Kallistos Ware, *The Power of the Name: The Jesus Prayer in Orthodox Spirituality*, Oxford 1974がある。

25) 『砂漠の師父の言葉』、「師父マカリオス」、19。(Soyons l'âme du monde, p. 163.)

26) 『講義』 X、8と10。(Soyons l'âme du monde, p. 167–169.)

27) 『手紙』、130、13–19。(Soyons l'âme du monde, p. 118–119.)

2.1.2. 祈りによって養われる内的姿勢

テゼのブラザーたちは上記のような「心の祈り」から持続的な内的姿勢が養われると認識し²⁸⁾、それを生きようと、またその豊かさを若者たちと分かち合おうとする。この内的姿勢を、ブラザー・ロジェは、「喜び、単純素朴、信頼、あこがれ、愛、平和」などの言葉で言い表す。教父たちも、祈りによって養われるこれらの内的姿勢が神の国への鍵であると理解する。すべてを扱えないが、この内「あこがれ」と「喜び」について見ておきたい。

ブラザー・ロジェはしばしば、信頼の内に今日を生きる人は、同時に神への「あこがれ」を生きる人であることを強調する。「人間の魂に宿る深遠な美しさ、それはあこがれという大胆さの中に息づいています。」²⁹⁾ このような「あこがれ」について深い洞察を示す教父の一人が、ニュッサのグレゴリオスである。

「神へと登って行く人は立ち止まることなく、始まりから始まりへと進みます。前進する人のあこがれは、既に得たものによって満たされることはないのです。」それゆえ、あこがれを抱く魂は、「前方にあるものへとつねに身を差し伸べることをやめない」³⁰⁾。

アウグスティヌスも語る。「キリスト者の全生涯は、ひとつの聖なるあこがれです。」³¹⁾

テゼにとって、「あこがれ」を生きる人とは、「自分がすべてを理解した」という誤解の中に腰を下ろすことなく、つねに最も大切なものにあこがれ、旅を続ける人、やがて到来するものを待ち望み、過程に生きる旅人であることを自覚して歩む人である。このようなテゼの「暫定性の力

学」³²⁾も、聖書と同時に、キリスト教がなお強固に組織化されていなかった時代の教父らからインスピレーションを得ていると考えられる。

次に、テゼが「喜び」を重んじることは、次の祈りに端的に示される。「主キリスト、山上で語られたあなたの福音の息づかいでわたしたちを支えてください。喜び、単純素朴、あわれみ。」³³⁾

本質を生きようとしつつも気難しさに陥らず、子どものような喜びを生きることを、テゼのブラザーたちは生の中心に置く。そして、復活に根差すこの喜びは、けっして自己充足的なものではなく、人を「苦悩する人々にさらに近づける」³⁴⁾喜びである。

証聖者マクシモスもこの喜びに目覚めていた。「喜びに心をはずませ、身を粉にして人に尽くすあわれみの心、これ以上にわたしたちを神に近づけるものはありません。」³⁵⁾

ヨハネ・クリュソストモスの復活祭の説教には、復活の歓喜が生き生きと表現される。「皆さん、主の喜びに入ってください。初めからの人も後から来た人も、豊かな人も貧しい人も、断食した人もしなかった人も、今日は同じように喜んでください！喜び祝い、この信仰の宴にあずかってください。溢れんばかりの神の慈しみを受けてください。」³⁶⁾

この喜びは「驚き」に結びついている。「喜びと共に驚きが訪れます。」³⁷⁾ 自分が計画していたものを獲得した喜びとは異質な「予期せぬ喜び」³⁸⁾、信頼とあこがれをもって将来を受けとめ、神が与える美しいものに驚くところに生起する喜びである。再び証聖者マクシモスによれば、「驚嘆だけが、神の把握しがたい力を把握するこ

28) マザー・テレサ/ブラザー・ロジェ『祈り』、73-78頁参照。

29) *Astonished by Joy, Letter 2000*.

30) 『雅歌講話』、第12講話。(Soyons l'âme du monde, p. 83.)

31) 『ヨハネ第1の手紙注解』、4、6。(Soyons l'âme du monde, p. 117.)

32) レナ、前掲論文 33頁。

33) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』、116頁。

34) *Astonished by Joy, Letter 2000*.

35) 『秘義教話』、24。(Soyons l'âme du monde, p. 144.)

36) 『復活祭の説教』(Soyons l'âme du monde, p. 94-95.)

37) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』、119頁。

38) 1998年の『手紙』のタイトル。*Joy Untold, Letter 1998*.

39) 『神の名について』、1。(Soyons l'âme du monde, p. 151.)

とができる。』³⁹⁾

2.2. 人間の連帯

上記のようにテゼの強調する「内なる命」は、あくまで人を「人間の連帯」に向かわせるものである。テゼの靈性において、社会参与に結びつかない靈的体験は空疎な自己満足であり、逆に靈的な中心をもたない活動は不確かな動作となる。

両者の結びつきは、バングラデシュに暮らすテゼのブラザーたちの生活に顕著に示される。簡素な生活に徹し、少数民族、アウトカースト、親のない子ども、障害者などの自立援助のために地道な働きを続け、他宗教の人々との共生に熱意をもって取り組むブラザーたちの活動は、日々の祈りと沈黙で育まれる「内なる命」から湧き出る以外のものではない⁴⁰⁾。

また、戦時中に危険を冒してユダヤ人をかくまったテゼの姿勢は、最近もボスニアやルワンダの戦争で親を失った子どもたちなどを迎え入れることに引き継がれている。またブラザー・ロジェは、数回にわたって国連事務総長を訪問し、「青年たちによる和解のための提案」を手渡すなど、政治的な場面でも慎重に発言を続ける⁴¹⁾。そしてテゼでの集いでは、世界各地で人権や社会の課題に取り組む若者たちが、ワークショップなどでその活動について語り合い、新しい勇気と洞察を得て各々の場に戻る。

教父らにとっても、「内なる命」から湧き出る「人間の連帯」こそ福音を生きる鍵であり、「神がキリスト者に委ねた責任とは、そこから逃げ出すことができないほど重大」⁴²⁾なものである。いくつかの面から、人間の連帯に関する教父の言葉とテゼの姿勢との結びつきを見ていく。

2.2.1. 苦悩する人々との連帯

2.2.1.1. 人類がひとつであること

「キリストが来られたのは、新しい宗教を始めするためではなく、すべての人に神にあるひとつのコミュニケーション交わりを差し出すためでした。」⁴³⁾この言葉のとおり、テゼのブラザーたちの召命とは、キリスト教を他宗教の人々や神を信じぬ人々に押しつけることではない⁴⁴⁾。それは、自らがイエスの十字架と復活に生の意味を見出すからこそ、そこに根差す、多様な人々の一致を求め、人類の根源的なコミュニケーション交わりに目覚め、その具体化のために自らを捧げてゆく道である

神への道が同時に他者に向かう道であることを、ガザのドロテオスはこう記す。「自分の賜物を用いて、ひとつになることに心を配りなさい。隣人とひとつになるほど、神とひとつになるのです。」そして、この説明に円の例話が引用される。「円とは世界、その中心とは神、円の半径とは人々の様々な生き方のこと。人々が神に近づきたいと憧れ、円の中心に向かって歩くとき、内側に入るにつれ、神に近づくと同時にお互いが近づくこととなります。」⁴⁵⁾

しかし、人類がひとつであると理解するとは、抽象的な心地よさに留まることではない。それはとりもなおさず、「見捨てられ、傷つけられている人々へと心を傾け」⁴⁶⁾ること、「人類の苦悩を和らげるための責任を担うように」⁴⁷⁾との神の招きに目覚めることである。ニュッサのグレゴリオスは、そのことをイメージ豊かに語る。

「人類は唯一の自然の本性によって規制されているので、だれひとりとして永続的な幸せは保証されていません。『人にしてもらいたいことを人にもするように』という福音の招きを忘れてはなりません。あなたが穏やかな水上を帆走しているのなら、遭難している人々に手を差し伸べなさい。海も、波も、嵐も、わたしたちにとって共有

40) *Taizé Letter*, Dec. 2000—Jan. 2001, Bimonthly 6 を参照。

41) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』のあとがき「テゼ共同体について」、165—166頁参照。

42) 『ディオグネートスへの手紙』、5、1—10。(Soyons l'âme du monde, p. 15.)

43) *A Prospect of Happiness? Letter 2001*.

44) *From Doubt to the Brightness of a Communion, Letter 1997*, n. 24 を参照。

45) 『解説』VI、77—78。(Soyons l'âme du monde, p. 173—174.)

46) *Astonished by Joy, Letter 2000*.

47) *A Prospect of Happiness? Letter 2001*.

48) 『貧しい人への愛について』、2。(Soyons l'âme du monde, p. 90—91.)

のものです。』⁴⁸⁾

アウグスティヌスによれば、これが「愛の始まり」である。愛の完成は「友のために命を捨てること」(ヨハネ15,13)であるが、愛の始まりは「世の富を持ちながら、兄弟が必要なものに事欠くのを見て同情しないものがあれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう」(Iヨハネ3,17)という言葉に示される。命を捨てることができなくても、持つ物を分かち合うことはできるからである。「見栄からではなく、心からの憐れみに溢れて行動するために、愛があなたの情を揺り動かすように！愛があなたを兄弟の苦悩に目覚めさせるように！」⁴⁹⁾

2.2.1.2. 富の分かち合い

人類が究極的にひとつであることへの目覚めと他者の苦悩への心の傾注は、具体的には「富を分かち合う生き方」で表現される。それゆえ、テゼの霊性の目に見える展開において中心となるのが、物質的にも「単純素朴な生活」である。

ブラザー・ロジェは、会則でブラザーたちに呼びかける。「生活を自らの労働によって支え、献金も遺産も贈り物もいっさい受け取らない道へとわたしたちは招かれます。」これは禁欲とは明らかに異なり、財産の保証から自由になることが「はかりしれない力の泉」となり、「すべてのことを、豊かな想像力で、創造の単純素朴な美しさのうちに整えていく」生き方につながる、という方向性に向かうものである⁵⁰⁾。

また、2001年の『手紙』でブラザー・ロジェは、今日様々な分野の学問研究の成果やテクノロジーの発展が経済的な連帯を以前よりも可能にすることに期待を寄せ、多くのNGOの活動などを「希望の泉」として高く評価している⁵¹⁾。

ナジアンゾスのグレゴリオスは、このことに関

して力説する。「委ねられた財産について悪い会計係になってはなりません。ベトロにこう叱られたくないのなら、『他人のものを自分のものにとっておくお前は何という恥知らずだ。神の平等を手本とせよ。そうすれば、もはや貧しい人はいなくなるだろう。』(使徒憲章)神の贈り物は、権力をもつ人々や国々に独占されてはなりません。すべては皆の共有のもの、すべては豊かなのです。』⁵²⁾

アンブロシウスも同じ立場で、富裕な人々に厳しく呼びかける。「あなたは自分の所有物から貧しい人に与えるのではなく、単純にその人のものを返すにすぎません。あなたは、万人のために与えられたものを横領してきたのですから。大地は皆のもので、金持ちだけのものではありません。あなたは無償の施しをすどころか、負債を支払うのです。』⁵³⁾

2.2.1.3. 見捨てられている人への共感

テゼにとって、このような具体的・物質的な分かち合いとは、あらゆる意味で見捨てられた人々に寄り添う深い共感コンパッションの心⁵⁴⁾によって、希望を分かち合うことの表現である。この「見捨てられた人々」とは、必ずしも経済的困窮の中に置かれた人だけではない。「先進国には、目に見えない死にゆく人の家があり、そこには見捨てられた子どもや若者たちが身を置いているのです。彼らは、破壊された関係や愛情の欠如によって、その存在の深みまで傷ついています。その心は、孤独のうちに死を体験しています。』⁵⁵⁾

共感コンパッションは、「何かをしてあげる」こと以上に、「単純にそばにいて、耳を傾けること」で表現される。「誰かが耳を傾けてくれるとき、いらだちによって生まれた壁や、過去に負った傷は消えていきます。誰かに聴いてもらうことは、魂のいや

49) 『ヨハネ第1の手紙注解』V、12。(Soyons l'âme du monde, p. 123-124.)

50) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』、122頁。

51) A Prospect of Happiness? Letter 2001, n. 10.

52) 『貧しい人への愛について』、第14の説教、24-27。(Soyons l'âme du monde, p. 76-77.)

53) 『貧者ナボトについての説教』、53。(Soyons l'âme du monde, p. 111-112.)

54) From Doubt to the Brightness of a Communion, Letter 1997.

55) ブラザー・ロジェ著、植松功訳『信頼への旅：内なる平和を生きる365日の黙想』、サンパウロ 1997年、12頁。

56) The Wonder of a Love, Letter 1995.

しの始まりです。」⁵⁶⁾

テゼでは、ブラザーたちが、希望する若者たちと個人的な面談をする場が設けられている。そこでブラザーたちは何かを諭し教えるのではなく、若者の生の声、葛藤や悩み、憧れや模索などに、^{コンパッション}共感をもってじっくり耳を傾ける。そのように、テゼは若者たちに答を与えるのではなく、問いを分かち合う姿勢を貫く。「人間の連帯」に関するテゼのあらゆる活動は、この「他者をありのままに見る」^{コンパッション}⁵⁷⁾ 共感の展開であると言える。

教父たちも具体的な行動の源泉となる^{コンパッション}共感を重んじる。ナジアンゾスのグレゴリオスは記す。「わたしたちは、不幸の中にあるすべての人々に自らの全存在を開かねばなりません。これらすべての人々にはわたしたちの^{コンパッション}共感を受ける権利があります。」⁵⁸⁾

教父時代に社会から見捨てられた人々としてしばしばあげられるのが、「重い皮膚病を病む人々」である。同じくグレゴリオスは、激しい感情を吐露しつつ、その苦悩について語る。この病にかかった人々は、貧しさよりもひどい苦しみを受けている。生きる術を剥奪され、皆が彼らを嫌悪し避けて通るので、体の病気よりも残酷な苦痛が与えられる。そうして、彼らは苦悩を癒す唯一の薬である「希望」に頼ることができない。グレゴリオスは、神の憐れみを知るキリスト者こそ、彼らの苦悩の証人となるべきことを訴える⁵⁹⁾。

ニュッサのグレゴリオスも、「^{コンパッション}共感と分かち合いこそ神の愛されることである」⁶⁰⁾と述べ、この病気を患う人々について語る。その悲惨な生活状況が述べられた後、この人々も神のかたどりであるのに、皆がそれを認めないことが嘆かれる。さらにグレゴリオスは、同情の言葉を語るだけで

は不十分で、行ないによって深い^{コンパッション}共感と愛情を表すべきことを説く。その際、彼らを僻地に隔離し、そこに食物を運ぶという方法には、愛と^{コンパッション}共感が欠如しており、結局彼らを社会から排除することにしかならないと忠告する⁶¹⁾。

2.2.2. 教会

「教会は、たゆみなく耳を傾け、癒しの業に仕え、和解を生き抜くとき、その本来の姿を最も豊かに光り輝かせます。愛のよどみない反射。」⁶²⁾ 先述のとおり、テゼは、分裂した教会が和解するならば人類の和解のよすがとなりうることを、自らに見える譬えとしつつ訴えてきた。その際にテゼは、諸教派の責任ある立場の人々との信頼関係や協働を大切に、自らが教会という体の一部であることを明示し続けてきた。こうして、テゼの和解のメッセージは諸教会によって真摯に受けとめられ、多くの共鳴を得て⁶³⁾、エキュメニズムの展開においてテゼはきわめて具体的で意義深い役割を果たしてきた。

「地上の信頼の巡礼」と名づけられたテゼが主催する青年大会も、若者たちを集め、教会から遊離したところで独自の運動を始めようとするものでなく、あくまで若者が教会に戻り、そこで和解を具体的に生きるように励まし送り出すという目的をもつ⁶⁴⁾。

このようにテゼは、自らを様々な傷を負う「現在の教会」の一部として明確に位置づけ、そこに仕えると同時に、教会の「本来の姿」への燃えるようなあこがれを分かち合おうとする。「テゼは、教会の春へのあこがれを喚起する行動としを常に模索している。それは、現在の困難に留まり続けずにそれを超えたところを見つめる教

57) *From Doubt to the Brightness of a Communion, Letter 1997.*

58) 『貧しい人への愛について』、第14の説教、24–27。(Soyons l'âme du monde, p. 73–74.)

59) 『貧しい人への愛について』、第14の説教、24–27。(Soyons l'âme du monde, p. 74–76.)

60) 『貧しい人への愛について』、1。(Soyons l'âme du monde, p. 88.)

61) 『貧しい人への愛について』、2。(Soyons l'âme du monde, p. 89–90.)

62) *Awaken to Joy, Letter 1993.*

63) 一例をあげれば、教皇ヨハネ・パウロ2世は1986年10月5日にテゼを訪問し、青年たちとブラザーたちに、自分の訪問の意味を語った。その中でヨハネ・パウロ2世は、ヨハネ23世がかつて告げた言葉を繰返して、テゼへの愛情と信頼を表した。「ああ、テゼ、あの小さな春の訪れ！」ブラザー・ロジェ著『テゼの源泉』、156–162頁参照。

64) *Astonished by Joy, Letter 2000, n. 13.*

65) ブラザー・ロジェ『テゼの源泉』、166頁。

会。それは、人間のもっとも深いところに息づく分かれ合いの大地、和解のパン種。」⁶⁵⁾

教父たちの多くも実際に司牧・牧会の責務を担う者として働きつつ、教会の「本来の姿」を追い求めてやまなかった。彼らの教会へのまなざしは、やはりテゼの教会観に少なからぬ影響を与えていると思われる。

2.2.2.1. ひとつの教会

「第二の千年紀は、多くのキリスト者たちが分裂してきた時期でした。第三の千年紀の初め、今すぐ、^{コミュニオン}交わりの内に生き、世界に平和を築くために必要なすべてのことに自分をささげていきませんか。」⁶⁶⁾ 教会の一致と交わりが希求されるのは、それ自体に最終的な意味があるからではなく、それ抜きには周囲にキリストの愛を証しできないからであり⁶⁷⁾、そのことによって、「教会はあわれみと慰めの門を広く開放放つ」⁶⁸⁾ ことができるからである。

組織上はひとつの教会に生きた初期の教父の時代にも、教会内部に様々な分裂が存在していた。ローマの司教クレメンスはそれに心を痛めつつ、一致への呼びかけを書き記した。「わたしたちの中にあるのは、ひとりの神、ひとりのキリスト、ひとりの愛の霊ではありませんか。なぜ、キリストの肢体を破り引き裂くのですか。なぜ自分の体に反逆するのですか。」⁶⁹⁾

証聖者マクシモスは、教会が様々な人々を一つにするダイナミズムをこう描く。「教会は、様々な人種、国籍、言語をもつ人々を皆、霊において再創造し、等しく神のかたちを刻み込みます。その皆に共通する本性のゆえに、違いにこだわってはいけません。キリストは、何本もの線が集められる中心となります。唯一の神の被造物たち

が、互いに友情を表現する場をもたず、よそ者であり続けることのないために。」⁷⁰⁾

アウグスティヌスによれば、ひとつの教会とは、そこに属する人々がひとつの体の肢体として、互いの賜物を喜び合うところに成立する。「兄弟のもつ賜物をねたまず、兄弟を愛するなら、それらすべての賜物はわたしのものとなります。つまり、それをわたしが、わたし自身の中にはなく、兄弟の中に持つことになるのです。」⁷¹⁾

2.2.2.2. ゆるしを生きる教会

ブラザー・ロジェは教会の和解について、テゼと親交の深かった教皇ヨハネ23世の言葉を度々引用する。「わたしたちは、だれが間違っていたのか、だれが正しかったかを調べようとしません。ただこう言うのです。『わたしたちを和解させてください。』」⁷²⁾

それぞれの教会が、一致のための声明文書にのみ心を配り⁷³⁾、「今すぐ、和解しなさい」(マタイ5, 23-24) という和解の緊急性を具体的に生きようとしないうち、「エキュメニズムは気づかぬうちにむなしい希望を育てている」⁷⁴⁾。テゼのエキュメニズムの特色は、この教会の和解の具体性と緊急性を生きようとする姿勢であるが、そこで要となる態度が「ゆるし」である。「教会という^{コミュニオン}交わりは、すべてをかけて愛し、ゆるすことによって透明になるとき、春の新鮮さによって福音の真実を輝き放つことができます。」⁷⁵⁾

理論的に正しさを追及することだけに向かう教会は、防衛的になり、そこでは他者や他教会への批判だけが育まれる。それゆえテゼは、各々が葛藤しつつもゆるしを生きることなしに教会の和解はないという姿勢を貫く。「ゆるしなくして、だ

66) *A Prospect of Happiness? Letter 2001.*

67) *Awaken to Joy, Letter 1993, n. 27.*

68) *From Doubt to the Brightness of a Communion, Letter 1997.*

69) 『手紙』、46、5-7。(Soyons l'âme du monde, p. 23.)

70) 『秘義教話』、1。(Soyons l'âme du monde, p. 151.)

71) 『説教：デュオニソス』、19、4-6。(Soyons l'âme du monde, p. 127-128.)

72) *From Doubt to the Brightness of a Communion, Letter 1997* の *A Call to the Younger Generations*, n. 3 から。

73) *The Wonder of a Love, Letter 1995, n. 15.*

74) *1999-2001, Letter 1999, n. 31.*

75) *A Prospect of Happiness? Letter 2001.*

れに未来があるでしょう。』⁷⁶⁾

アンブロシウスは、裁きではなくゆるしこそ、キリストを証しする教会の生命線であると認識していた。「教会は全宇宙を贖う天の恵みのかたどりです。ですから、人の弱さや欠点を改めさせることに専念している人は、弱さという重荷を一緒に背負い、自分の肩にかつぐべきであって、それを拒絶してはなりません。』⁷⁷⁾

アウグスティヌスは端的に語る。「罪のゆるしのあるところ、そこに教会があります。』⁷⁸⁾

砂漠の師父も、共修生活にとってゆるしが不可欠であることを示す。過ちを犯した兄弟を裁くために呼ばれた師父モーセは、穴の空いた籠に砂を詰め、それを背負って出発した。到着したとき、「それは何ですか」と尋ねる兄弟たちにモーセは答える。「わたしの罪は背後に流れ落ち、わたしには見えない。そのわたしが、今日は他人の罪を裁こうというのか。』⁷⁹⁾

おわりに

以上、テゼが作成した *Soyons l'âme du monde* を手掛りとして、テゼが生き、分かち合おうとする霊性にとって、教父らの存在が多くのインスピレーションの源となっており、そこにひとつのたしかな歴史的基盤があることを見てきた。揺れ動くこの時代、多くの若者たちがテゼの生きるある種単純素朴で透明な姿勢に共鳴し、自分の存在をそこで確かめようとしてきたのだが、このテゼの霊的アイデンティティーが、聖書と共に教父という初期のキリスト者たちの洞察から多くのヒントを得ていることは示唆に富む。

わたしたちはここに、古代と現代という歴史の隔たりを霊的な深みで埋める、キリスト教の実践的展開におけるひとつのモデルを見出すことができるのではないだろうか。

76) 1999–2001, *Letter 1999*.

77) 『償いについて』 I、1–4 と II、5。(Soyons l'âme du monde, p. 107–109.)

78) 『ヨハネ第1の手紙注解』 X、10。(Soyons l'âme du monde, p. 125.)

79) 『砂漠の師父の言葉』、『師父モーセ』、2。(Soyons l'âme du monde, p. 162.)

The Taizé Community and the Church Fathers — Based on *Soyons l'âme du monde*

ABSTRACT

Spiritual identity of the Taizé Community in France, which attracts innumerable young people today, is greatly based on the historical heritage of the Church, especially on the Church Fathers. *Soyons l'âme du monde*, a selection from the Fathers' writings made by Taizé, indicates that the Fathers' thoughts confirm Taizé-spirituality in a historical and authentic way. It becomes clearer in examining texts in the framework of "Inner Life and Human Solidarity", which has been the theme of youth meetings in Taizé for many years. Silence and repetition of short essential words taken from the Bible are the heart of prayer both for Taizé and the Fathers. This kind of prayer nourishes one's inner attitudes, "trust, joy, simplicity, mercy, longing, freedom", as Brother Roger, the founder of Taizé, often expresses. The Fathers also frequently used these expressions as the keys to the kingdom of God. A person of prayer is at the same time a person attentive to unity of the human family, and to the suffering of others. The Fathers put great emphasis on "compassion" to the abandoned, which should be expressed in action. Today Taizé tries to represent such "compassion" by their own lives, e.g., by the works of Brothers in the poorest parts of the world. In the process of "Human Solidarity", reconciliation of the Church is urgently demanded. The Fathers realized the key to unity is nothing but "forgiveness". Along this line, Taizé, as an ecumenical community in its essence, concentrates on concretely living the urgency of reconciliation (Mt 5: 23-24) among different Christians, not on making arguments or documents.

Key Words: the Taizé Community, the Church Fathers, Spirituality